

## 子羊の群れ

ピーター

今は終わりの時、聖霊の時です。ペンテコステの日に降り注いだ聖霊が、今やヨエルの預言の最終段階として全世界に臨んでいます。

**神がこう仰せになる。終わりの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言し、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう。** (使徒行伝 2:17-18)

終わりの時代は、恐ろしいことが起こり人々の心が冷える、と聖書にあります。しかし、同時に、終わりの時代は聖霊の時でもあり、「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ 24:14)。

今この終わりの時代に、神さまが、一つの幻を示されました。教会の内外にいる多くの傷ついた羊たちに、主イエスさまの愛とやさしを注ぎなさい、と言われるのです。教会という柵の中にいる羊たちも傷ついているが、柵の外にいる傷ついている羊の数は膨大です。教会の内にいるものの何十倍、何百倍、いや何万倍という羊たちです。

私、個人的に、神憑(がかり)みたいなのを言う人は嫌いです。神さまがこう言われたとか、こんな幻を見たから……云々(うんぬん)言いながら、聖霊さまの麗しさ、美しさのない人の言動は信用ならないからです。聖霊の啓示は、つねに聖書とハーモニーしなければウソです。

だから、この度、私自身があたかも神憑りのような発言をするというのは大変つらいことなのですが、誤解のないよう私の「所信」をここに発表します。人間的に言うならば「所信」ではありますが、またこれが「神からの幻」であることも確信します。「所信」というのは、このアイデアがまったく突然に来たのではなく、私が伝道の初期、15、6年前から信じ、その方向に進んできたことの延長上にあることだからです。「神からの幻」だと言うのは、それが今この時点ではっきりと示されてきたからです。この幻はキリストの教会と関連しています。神のいのちを傷ついた羊たちに流すのは教会の任務です。

しかし、教会とは何なのでしょう。キリストの教会とは、私の属している長老派教会とか日基教団とかカトリック教会という組織のことではありません。それらは目に見えないユニバーサルな神の教会の目に見える地上の教会の一部ではありますが、地上の個々の教会(ローカル教会)は、どれ一つをとっても不完全であり、キリストのすべてを現す体ではありません。ローカルの教会が不完全であるというのは、単なる現状認識ではなく、聖書自身、ローカル教会の根源的性格として認めています。いわば、人間がいかにキリストのきよめに与かっても、アダム以来の原罪から完全にきよめられるものでないのと同様、地上の教会は完全な花嫁とはなりえない。主イエスが再臨する暁には、地上の教会は理想である「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会」(エペソ 5:27) と変えられているでしょう。地上の教会が不完全であるということは、しかし、決してマイナスではないのです。もし地上の教会が、己の不完全性を謙虚に認め、ただ一人完全なる方キリストさまを霊とまことをもって拝し、愛なる方を中心に他の者との交わりをするならば、主の御霊は、自己の不完全さを認め、自分の弱さを認める者に、恵みと愛を注がれるからです。

教会とは、組織としての集団ではない。伝統的に、地上の教会は様々に分かれています。これを一つにしようとするエキュメニカル(超教派)運動がありますが、私の関心ではありません。

それでは、教会とは、教理の正しさに基づくイデオロギーの集団であるか。教理の正しさという美名がいかに欺瞞(ぎまん)であるかは、長いキリスト教史を見れば歴然としています。ローマ教会の腐敗を指摘し、

信仰義認を提唱したプロテスタント教会は以後、千々に分かれ、各々自己の正しさを主張するようになりました。

ああ、教会よ、あなたはなぜ目覚めようとししないのか。あなたはなぜ、おのれの自己義認の傲慢さにとらわれているのか。教会の柵をあまりに高くかかげるあまり、柵の外にいる、幾千幾万という傷ついた羊をないがしろにしている罪がわからないのか。

教会とは、組織でもイデオロギーでもない。教会とは、キリストのからだであり、キリストの花嫁であります。イエス・キリストの十字架のゆるしを受ける者は、ことごとくキリストの教会に属します。しかし、これは目に見えないユニバーサルな天的教会です。そして、わたしたちはまた目に見える地上の教会にも参加する者です。地上の教会は、本質的に不完全なものでありますから、聖霊の導きに忠実でありキリストにある愛と謙虚さを失ったら、味の無い塩同様、役に立たないものとなる。

地上の教会がキリストにあるまことの霊的礼拝をするなら、必ず神の愛に満ちたものとなり、互いに受け入れるようになります。教理や伝統が違って、イエス・キリストの十字架の血に贖われたものとして、他教会をも、神学の異なる信徒をも兄弟姉妹として受け入れるでしょう。

クリスチャンの交わりは、教理でも伝統でもない、ましてや偉い先生中心でもない。ただ生ける神イエス・キリストにおける愛の交わりであります。

私がここに提唱するのは、そのキリストにある愛の交わりであります。教会教派ではないキリストさま中心の交わりなのです。

教会の内外にいるたくさんの子羊に、イエス・キリストさまの愛を単純に信じて流そうではないか。十字架のゆるしといやしを惜しみなく注ごうではないか。

**わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。……そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼いとなるであろう。** (ヨハネ 10:16)

「子羊の群れ」は、イエスの愛に感動し、その愛のゆえに共に祈り合う集いです。いわば「家庭集会」運動なのですが、特定のローカル教会の家庭集会ではなく誰もが参加できる集いです。難しい教理も規約も必要ないでしょう。

今は聖霊の時です。新しい酒は、新しい革袋を必要とする。激しく注がれている聖霊の時、新しい、かつ、柔軟なハートがいます。「子羊の群れ」は、イエス・キリストの愛といやしを単純に文字通り信じ祈る会です。体のいやしから心のいやしまで、家庭や人間関係のいやしを祈ります。聖書の「救い」とは、実に「いやし」のことなのですから。

しかし、「子羊の群れ」は、医学を拒否したり、信仰さえあれば皆いやされると主張するような狂信家とはなんの関係もありません。イエスさまの愛は、つねに美しくきよらかです。

幾千幾万という子羊が傷ついたまま放浪しています。主イエス・キリストの愛が羊をいやすのです。十字架から流れてくる血潮が彼らのいのちとなるのです。イエスを死人の中からよみがえらせた復活の力が死せる体にいのちを与えるのです。すべてをつつみ、すべてを活かす愛がある。

時は、来ている。今がその時です。

1989年6月20日

(「ふいらでるふいあ物語」より)